

# 横浜国立大学教育人間科学部AO入試受験予定者の特性分析

—— 高校階層に着目して ——

望月由起 (横浜国立大学 大学教育総合センター入学者選抜部)

本研究では、横浜国立大学教育人間科学部AO入試の受験予定者の特性、中でも「大学受験に対する意識や態度」について、調査・分析を試みた。その結果、一般選抜に比べ、AO入試に対しては、多様な学力レベルの高校に在籍する生徒の志願がみられたが、中下位層の高校に在籍する生徒の意識や態度」では、最終選抜（大学入試センター試験で6割以上の得点率）をクリアすることの難しさが懸念される結果となった。

## 1. 問題と目的

大学受験競争の過熱解消、受験生の負担軽減等を目標とし、入試改革は長年にわたり議論され、近年の大学入試政策では、選抜方法や評価尺度の多元化が積極的に推進されている。その結果として、指定校推薦・自己推薦・スポーツ推薦といった推薦入学、帰国生選抜、社会人選抜など、「学力一斉筆記試験（中村1996）」以外の選抜方法を実施する大学が、著しく拡大していることは周知の事実である。

中でも、アドミッションオフィス入試、いわゆるAO入試の拡大は顕著である。アメリカやイギリスにおけるAO入試が、統一テストの成績を重視し、志願者全員を対象とするケースが多くみられるのに対し、日本におけるAO入試は、「教科の筆記試験は行わない面接重視の入学者選抜方式（小野 2000）」であり、特別選抜入試の一方式として行われているものである。1997年の中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」において、大学・高等学校の入学者選抜を、「総合的かつ多面的な評価など、丁寧な選抜」により行うことの必要性が謳われて以来、日本型AO入試は、多元的評価による入学施策の一つとして奨励され、2000年度以降、国公立大学でも実施されている。文部科学省のデ

ータ（各年度「国公立大学入学者選抜実施状況の概要」）によれば、AO入試を実施する大学は年々増加しており（図1参照）、2006年度には、国立大学の36.1%、公立大学の21.1%、私立大学に至っては68.8%もの大学で実施している。

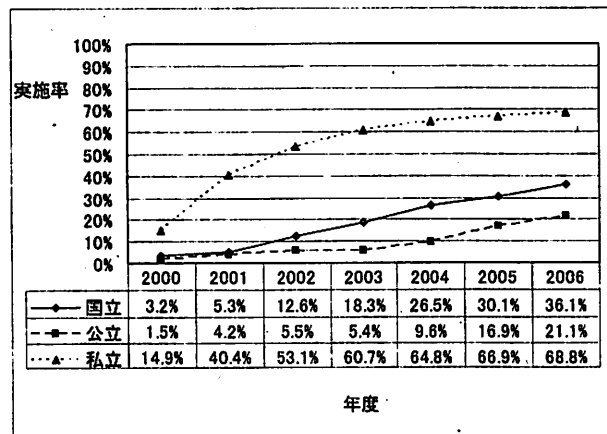


図1 AO入試実施大学率

(文部科学省のデータをもとに、筆者が作成)

本学でも、2003年度より工学部、2006年度より教育人間科学部・学校教育課程・教科教育コース<sup>1)</sup>においてAO入試を実施している。先にも述べたように、AO入試は多元的評価による入学施策であるがゆえに、本学で実施しているAO入試においても、一般選抜に比べ、多様な学力レベルの高校階層に在籍する

生徒の志願が予測される。実際に、白川・島田 (2007) も、国立大学に対する調査をもとに、「AO入試により、これまで合格実績の無かった、あるいは少なかった高校からの出願・入学が増えたことが窺われる」と述べている。こうした傾向は、学力以外の側面を評価しようとする日本型AO入試の意図に合うものと言えよう。しかし、多様な学力レベルにあるAO入試受験生が、「いかなる意識を持ち、いかなる態度で大学受験に取り組んでいるのか」という質的な側面について、十分な検討を行ってきたとは言いがたい。今後は、AO入試受験生の量的な側面のみならず、その質的な側面にも目を向けていくことが必要ではなかろうか。

そこで本研究では、本学AO入試受験予定者の特性、とりわけ「大学受験に対する意識や態度」について調査分析を行うこととした。

AO入試の量的拡大に伴い、各大学のアド

ミッション・センターや関係機関では、AO入試に関する調査を組織的・継続的に取り組んでいる。その中で、「AO入試は意欲的な学生の獲得に有効である (山岸・加茂他 2004)」、「AO入試による入学者は他の選抜方法による入学者よりも、進学後の適応状況が良い (渡辺 2005)」といった質的な側面に対する研究成果も示されている。しかし、これらの研究は、志望大学入学者を対象とした調査であり、受験予定の段階の者に対するものではない。本研究は、本学のみならず、AO入試に取り組む多くの大学に対し、何らかのインプリケーションを付与しうるものと思われる。

なお、本研究では、先に挙げた本学AO入試実施学部のうち、選抜方法のプロセスが単一である教育人間科学部を志望する生徒に焦点をあてることとする。2007年度教育人間科学部のAO入試選抜方法および求める学生像は、表1のとおりである。

表1 教育人間科学部(学校教育課程・教科教育コース)AO入試選抜方法および求める学生像

募集人数	30人(選抜の結果、合格者数が募集人数を下回ることもある)
求める学生像	小学校教員になろうとする強い意欲を有し、子どもに共感し、探究心や情熱を持って創造的な活動にチャレンジする人
出願要件	(1) 次のいずれかに該当する者 ① 高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者及び平成19年3月卒業見込みの者 ② 通常の課程による12年の学校教育を修了した者及び平成19年3月卒業見込みの者 ③ 高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者及び平成19年3月31日までにこれらに該当する見込みの者 (2) 小学校教員になろうとする強い意欲を有し、合格した場合は本学に入学することを確約できる者
選抜方法	(1) 第一次選抜…平成18年9月16日(土) 自己推薦書、調査書、課題レポートの評価と合わせ、聴講・論述試験 <sup>2)</sup> を行い、それらの結果を総合的に判断する。 (2) 第二次選抜…平成18年10月8日(日)、9日(月) 基礎実技試験 <sup>3)</sup> と面接試験(プレゼンテーションを含む) <sup>4)</sup> を行い、課題レポートの結果も加えて総合的に判断する。 (3) 第三次選抜…平成18年11月6日(月) 附属小学校において、子どもとのふれあい活動を通して、小学校教員にふさわしい資質や適性を評価する実践参加型試験を行う。 (4) 最終合格者決定…平成19年2月10日(土) 大学入試センター試験を5教科7科目または6教科7科目課し、合計点(900点満点)540点以上の場合。

本学教育人間科学部A〇入試では、最終選抜として、「大学入試センター試験で5教科7科目(もしくは6教科7科目)を受験し、6割以上の得点率をとること」を課しているが(表1 選抜方法(4)参照)、実施初年度の2006年度、翌2007年度ともに、この段階での不合格者が少なからずみられた。こうした現状をふまえると、教育人間科学部A〇入試受験予定者の特性について、彼らの学力レベルに基づく高校階層に着目して捉えることは、本学における重要な課題であると思われる。

## 2. 調査方法

- ・調査時期：2006年7月～8月
- ・調査対象者：

首都圏に所在する塾・予備校の夏期講習に通い、本学教育人間科学部A〇入試の受験を予定している者76名(男子22名,女子54名)<sup>5)</sup>。他の塾・予備校ですでに回答した場合には、再度回答をしないよう求めている。

- ・調査方法：

各調査対象者が通う塾・予備校の1つの教室に集め、集合調査法により無記名の質問紙調査を行い、その場で回収を行った<sup>6)</sup>。

- ・本研究における分析項目：

1. 本学教育人間科学部一般選抜受験予定<sup>7)</sup>  
「受験予定」「未定」「受験しない」を選択肢とし、いずれか1つを回答するよう求めた。
2. 出願予定の入学者選抜方法(本学教育人間科学部A〇入試以外)

国公立大学の場合には、「前期」「中期」「後期」「推薦」「A〇」を、私立大学の場合には、「一般」「センター」「推薦」「A〇」を選択肢とし、該当するもの全てへの回答を求めた。

3. 受験勉強型(受験勉強をしている教科数)

多くの国公立大学が一般選抜で課している「センター試験5教科7科目」以上に対応すべく受験勉強に取り組んでいる「国公立型」または「その他」を選択肢とし、いずれか1つを回答するよう求めた。

## 4. A〇入試受験理由

A〇入試受験理由について、自由記述による回答を求めた。

## 3. 調査結果

### 3.1 調査対象者の在籍する高校階層

まず、フェイスシートにて回答を求めた「高校名」に基づき、高校受験雑誌(旺文社2006)に記載されている合格ライン<sup>8)</sup>偏差値を参考にして、上位校(偏差値60以上)、中下位校(偏差値60未満)の2つのカテゴリーに調査対象者を分類することとした。

普遍的であるとは言えないが、調査を行った塾・予備校の進路指導担当者によれば、偏差値60未満の中下位校においては、一般選抜で本学教育人間科学部を志望する生徒はさほど多くないものと思われる。

しかし、本研究の調査対象者数は、上位校25名に対し、中下位校51名であった。この結果から、「受験を予定している」段階でも、多様な学力レベルの高校階層の生徒の志願がA〇入試にはみられることが示唆された。

### 3.2 本学教育人間科学部の一般選抜受験予定

以降、先に示した「上位校」「中下位校」の2つのカテゴリー別に分析を進めていく。

まず、「調査対象者は、一般選抜でも、本学教育人間科学部を受験するのか?」について調査分析を行った。その結果が図2である。

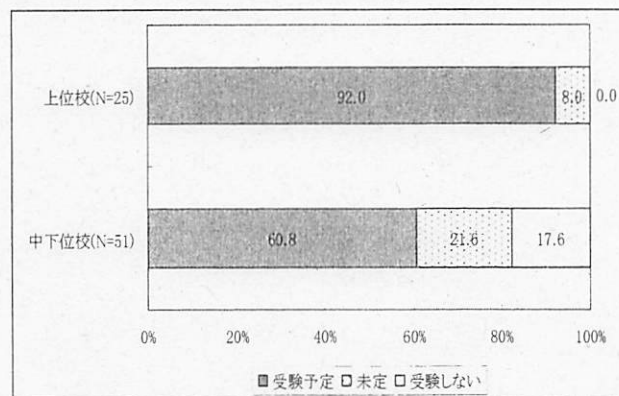


図2 本学教育人間科学部一般選抜受験予定

上位校においては、92.0%の生徒が「受験予定」と回答したのに対し、中下位校において「受験予定」と回答した生徒は、60.8%に過ぎない結果となった。逆に、「受験しない」と回答した生徒は、上位校ではみられなかったのに対し、中下位校においては、17.6%にも及ぶ結果が示された。

間科学部 A O 入試以外に出願を予定している大学・選抜方法には、高校階層により差異がみられるのか」について分析を行った結果が図 3 である。

なお、調査対象者の中に「中期」と回答した者はいなかったため、以降の分析対象からは外すこととした。

### 3.3 出願予定の入学者選抜方法

では、調査対象者は、本学教育人間科学部 A O 入試以外に、どのような大学・選抜方法の併願を考えているのだろうか。「本学教育人

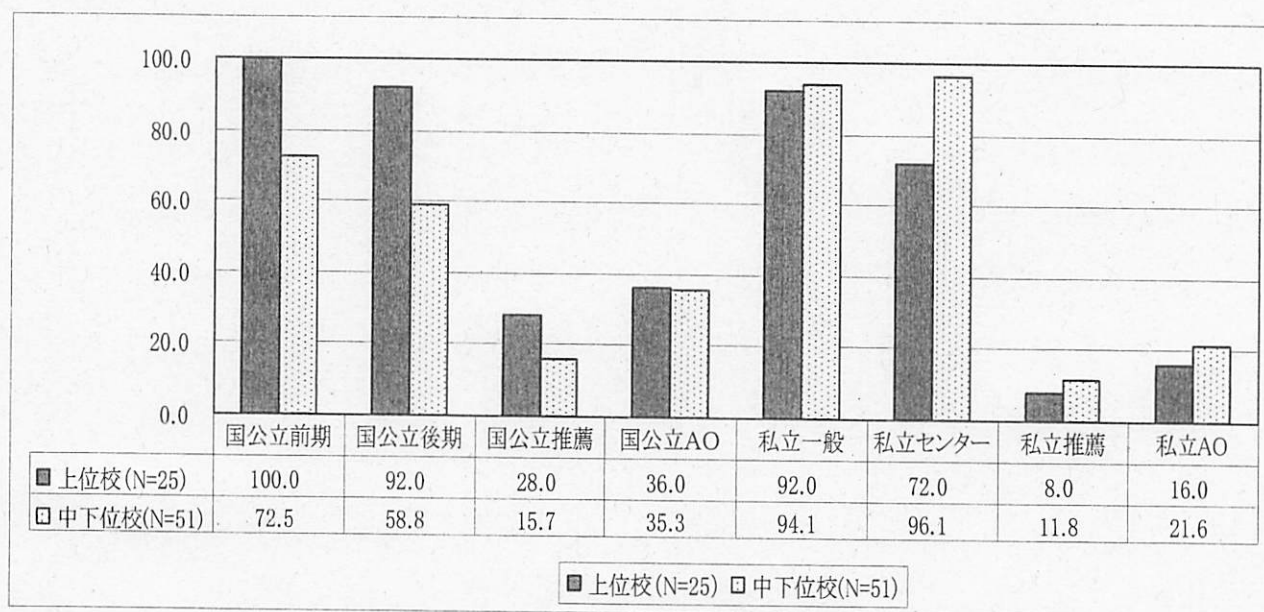


図 3 出願予定の選抜方法（複数回答有）

図 3 からみてとれるように、上位校の大多数の生徒は、一般選抜（前期・後期日程）でも国公立大学を受験する予定であることが示された（前期日程 100.0%、後期日程 92.0%）。これに対し、中下位校の生徒は、一般選抜でも国公立大学を受験を予定している者はさほど多くはなく（前期日程 72.5%、後期日程 58.8%）、むしろ私立大学との併願者が多いことが示された。

しているのだろうか。先の分析結果から、中下位校の生徒は、一般選抜でも国公立大学を受験を予定している者は多くないことが示されているが、そもそも、彼らは、国公立大学の一般選抜にも対応できるような受験勉強に取り組んでいるのだろうか。受験勉強型（受験勉強をしている教科数）と高校階層の関連について分析を行った結果が、図 4 である。

### 3.4 受験勉強型

（受験勉強をしている教科数）

では、調査対象者は、いかなる受験勉強を

上位校の生徒は、調査対象者すべてが、「国公立型」の受験勉強をしていることが示された。これに対し、上位校の生徒と同様に、「国公立型」の受験勉強をしている中下位校の生徒は、68.6%に過ぎない結果となった。

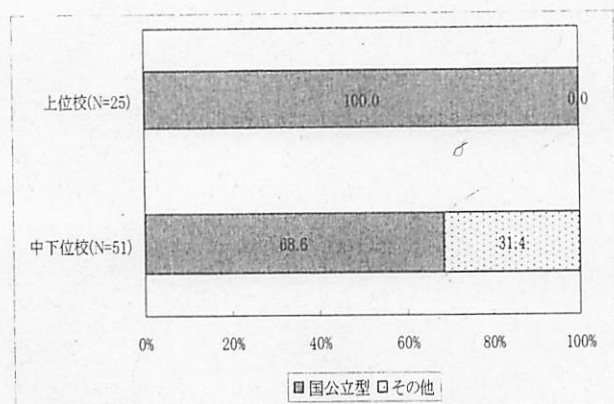


図4 受験勉強型  
(受験勉強をしている教科数)

### 3.5 AO入試受験理由

これまでの分析結果に基づく、学力レベルが中下位層の高校に在籍し、本学教育人間科学部(学校教育課程)AO入試の受験を予定している生徒は、「本学教育人間科学部を志望して」というよりも、「教科の筆記試験の負担が軽いAO入試だから」受験を予定しているのではないかと懸念される。

そこで、以降では、「AO入試受験理由」に関する自由記述をカテゴリー分析し、高校階層による「AO入試の位置づけの相違」をみていくこととした。

その結果、以下の3つの傾向が「AO入試受験理由」として抽出された。

- ①志望校を受験する機会が増える
- ②自己をアピールできる

例えば、「教職を志望する理由を直接伝えることができる」など。

- ③学力試験よりも合格可能性が高い

例えば、「生徒会や部活動で成果を残し、センター試験の結果より自信がある」など。

さらに、これらの傾向に該当する回答を高校階層別に分析した結果(図5参照)、上位校の生徒は96.0%もの者が、「①志望校を受験する機会が増える」に該当し、「③学力試験よりも合格可能性が高い」に該当した者は16.0%と非常に少ない結果となった。

この結果より、彼らにとってAO入試は、

「合格可能性はともかく、志望している大学に合格するチャンスを広げる」位置づけにあることが示唆された。

他方、中下位校の生徒において、「①志望校を受験する機会が増える」に該当した者は70.6%であり、その他の受験理由の回答数との差異はさほどみられなかった。

この結果より、彼らにとってAO入試は、「志望校を受験する機会」と同時に、「自己をアピールできるとともに、学力試験よりも合格可能性が高い」と位置づけられている選抜方法であることが示唆された。

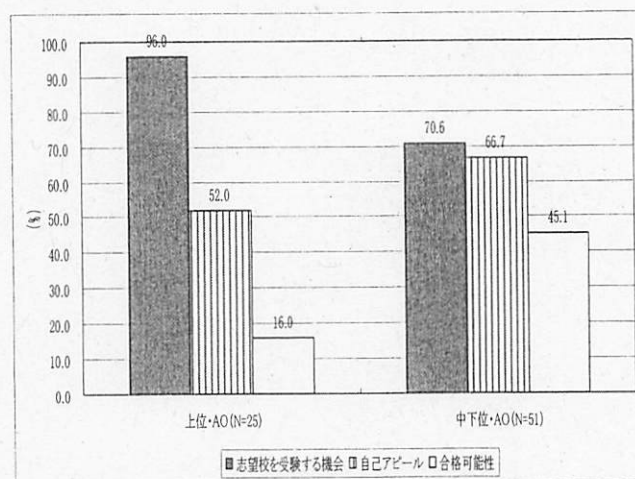


図5 AO入試受験理由 (複数回答有)

## 4. おわりに

最後に、今後検討すべき課題について、述べることにする。

分析対象者数が十分ではなく、単純な分析方法を採ったことにより、本研究の知見は、その傾向を捉えるレベルに留まっていることを、まずはお断りせねばなるまい。

その上で、これまでの分析結果に基づく、本学教育人間科学部(学校教育課程)のAO入試受験予定者も、一般選抜に比べ、多様な学力レベルの高校階層の生徒がみられたが、その層により、大学受験に対する意識や態度には違いがあることが示された。望月(2007)は近年重視されている「在り方生き方指導」が高校生の難関校へのアスピレーションをい

たずらに高める可能性を指摘しているが、こうした影響を受け、AO入試が本学のみならず国公立大学入学のための抜け道的手段として着目されているのではないかと危惧される。

本研究でみられたような中下位校の生徒の意識や態度では、本学教育人間科学（学校教育課程）AO入試の最終選抜で課す「大学入試センター試験で6割以上の得点率」をクリアすることは容易ではないだろう。実際に、この段階での不合格者が少なからずみられたこともふまえ、選抜方法に関するアナウンスを幅広い高校階層に対して行い、大学受験に対する意識や態度の変容を促すとともに、大学側としても、選考の進め方や基準の再検討を行うことが今後の課題となるだろう。

「国立大学は、先行する私学の「面接重視」を尻目に、AO入試を始めるにあたり、一様に「成績重視」を謳い文句にしている（小野2000: 141）」のが実態であれば、本研究の知見は、本学のみならず、AO入試を実施する多くの国立大学に対してもインプリケーションを付与しうるものと思われる。

## 注

- 1) 学校教育課程には、人間形成コース（教育基礎・心理発達・日本語教育）、教科教育コース（国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健体育・技術・家庭科・英語）、障害児教育コースの3つのコースがある。
- 2) 理解力、思考力、表現力をみるために、小学校教育に関する講義を聴講し、その中で提示された課題について、その場で論述するものである。
- 3) 小学校教員にふさわしい表現、運動の基礎的能力をみる。音楽・美術・体育の3科目から2科目を事前を選択する。
- 4) 小学校教員にふさわしい資質や適性をみるために、提出書類の内容や学校教育に関する質問を行う。また提出した課題レポートの内容をふまえ、具体的な授業場面を個

人で5分間実演するものである。

- 5) 調査対象者数自体は76名と多くはないが、この年のAO入試志願者数が128名であったことをふまえると、本研究の分析結果は意味があるものと思われる。
- 6) 調査実施者は、筆者または各塾・予備校の担当者である。
- 7) 本学教育人間科学部（学校教育課程）は、後期日程の募集をしないため、「前期日程での受験意思」を問うものである。
- 8) 合格の可能性を示すラインとして、確実ライン（80%以上）、合格ライン（60%以上）、可能ライン（40%以上）が示されていた。

## 文献

- 望月由起 2007, 『進路形成に対する『在り方生き方指導』の功罪—高校進路指導の社会学—』東信堂
- 中村高康 1996, 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立—公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐって—」『教育社会学研究』59, pp145-164.
- 小野博 2000, 『大学「AO入試」とは何だ』毎日新聞社
- 旺文社 2006, 『高校受験 2007』
- 白川友紀・島田康行 2007, 「募集要項と募集広報から見た国立大学AO入試」『大学入試研究ジャーナル』17, pp1-6.
- 渡辺哲司 2005, 「AO入試と大学における学習」『大学教育学会会誌』27(1), pp146-151.
- 山岸みどり・加茂直樹・鈴木誠・池田文人 2004, 「北海道大学AO入試—平成13年度～15年度」『大学入試研究ジャーナル』14, pp57-62.

## 謝辞

本稿をなすにあたり、多くの受験生の方々や塾・予備校関係者の方々から調査協力をいただきました。この場をお借りして、謝意を申し上げます。